

三報告に対するコメント(1) ——20世紀中国におけるナショナリズムと東アジア世界——

渡辺直土

今年度の中国現代史研究会の総会シンポジウムは前年度までに数回にわたり継続的に議論されてきた共通テーマ「現代中国における『統合』と『分節化』」にいったん区切りをつけ、「20世紀中国史再考」という新たなテーマが設定された。今年度はその1回目としてナショナリズムが中心的課題となり、20世紀中国全体を視野に入れて3人のパネラーの先生方から刺激的な問題提起がなされた。周知のとおり、ここ数年来の東アジア世界においては小泉元首相の靖国神社参拝問題や、2004年のサッカーアジアカップにおける中国でのブーイング問題、2005年の中国各地における反日デモ、そして再燃した従軍慰安婦問題など、歴史認識問題と関連してナショナリズムが大きくクローズアップされている。日中間におけるナショナリズムの高まりとともに双方が排他性を強め、相互に批判対象を理解できないままで反日、反中感情が高まるという悪循環の中で、今回のシンポジウムは中国のナショナリズムについて、歴史的視点を組みこんでその源流をたどり、認識を深めるという意味で重要な問題提起となったのではないかと思う。とはいえ、討論者はナショナリズム分析の専門家ではなく、現代中国政治分析を専門としているものの20世紀中国全体を見通して問題提起ができるほどの能力を持ち合わせているわけでもない。事前に事務局員を中心に開催された勉強会で報告を担当した関係で当日の討論者も担当することになったが、準備も不十分なままでシンポジウムに臨んでしまった結果、当日の議論を活性化させるという討論者としての役割を全く果たすことができなかったことをこの場を借りてお詫びしたい。以下、3報告それぞれについて、その内容を振り返りつつ若干の疑問点を提示し、新たな問題提起のための足がかりとなればと考えている。

まず、茂木報告についてである。茂木氏は伝統的中華世界から近代国民国家への再編を論点として、19世紀中国から20世紀中国を見通す形で非常に視野を広くとった議論を展開した。マーク・マンコールのいう「東南の弦月」と「西北の弦月」という二元構造をもつ清朝は日本帝国主義の影響を受ける中で自己を領域的に画定させ、その空間を鋳型として国民国家建設を進めることになった。その中で国際社会に文明国として認知されるため「西洋基準」を取り込み、自らのもつ伝統を再定義していく過程が分析されている。ナショ

ナリズムと関連するここでの論点として、中華としての伝統を再定義する中で「ヨーロッパ近代」、あるいは「西洋基準」の受容はどのようなものであったのかということが挙げられる。すなわち、例えばヨーロッパに由来する価値の1つである民主主義について、現在の中国共産党政権は欧米の民主主義をそのまま中国で実践するのではなく、中国の実情に即した「社会主義民主」の下で改革を進めることをその方針としている。つまり、19世紀において「西洋基準」がそのまま中国に取り込まれたのか、何らかの形で中国的なものに改変されたのかはナショナリズムの源流をたどる上で大きな意味をもつであろう。

次に、江田報告についてである。江田氏は茂木氏とは対照的に、民衆運動史の視点から1925年5月30日の「五・三〇事件」について、克明にその状況を復元している。これは2005年の反日デモとの対比という意味でもリアリティーの感じられる興味深い報告であった。その中で江田氏は排外主義的色彩を有していた当時のナショナリズム運動がデモクラシーを同時に追求していたことに注目し、デモクラシーの要素がナショナリズムが暴力的な排外主義に発展することに対してブレーキをかけるのではないかと見て、2005年の反日デモについてもデモクラシーが中国に定着するにつれその暴力性は減少するであろうとしている。ここで民主主義とナショナリズムの関係という重要な論点が生じる。例えば、戦後日本においては安保闘争を経て暴力性を持った排外主義的ナショナリズムの運動は沈静化に向かうが、それは民主主義が定着したことによるものといえなくはない。しかし、後述するように加々美氏によればそれは欧米への「抵抗」を放棄し、社会の「無思想」化が進んだものによるとされる。確かに、言論の自由や思想の自由など、広義の民主主義的要素が定着すれば排外主義、あるいは暴力性が減少する可能性は想定できるが、この点についてはさらに深く追求する必要がある。

最後に、加々美報告についてである。加々美氏は竹内好の議論を再考することを通して、現代日本社会を「無思想状況」と規定し、台頭するナショナリズムを「自負心のナショナリズム」あるいは「無根のナショナリズム」とみなした上で、同様の状況は現代中国社会にも現われているとする。すなわち、19世紀以降の「ヨーロッパ近代」のアジアにおける「自己拡張」の圧力に対し、アジアは敗北し「自己喪失」を迫られる中で、日本はヨーロッパに対する「抵抗」を放棄し近代化を推進した。他方で中国は革命に成功し、毛沢東の下で「ヨーロッパ近代」に対する「敗北」を自覚しないがために「抵抗」を忘却し、「非欧米的な近代化」を目指す破綻したため、改革・開放以降は「敗北」を自覚するがゆえに「抵抗」を放棄して近代化を推進した。こうして日中両国とも近代化を前にして「自己喪失」し、「無思想状況」が現われ、排他性が強く、情緒的な反中、反日の情念を特徴とする「自負心のナショナリズム」「無根のナショナリズム」が台頭しているとみなした。これに対し、「ヨーロッパ近代」の圧力を受けながらも「非政治」世界である「等身大」世界に意識を係留し、国家・政治を撃つナショナリズムを「抵抗のナショナリズム」あるいは「有根のナショナリズム」と呼び、現在の日中両国社会におけるナショナリズムをめぐる

状況が「無根」「無思想」によるものであることをまず自覚することの必要性を強調した。竹内好を基軸に展開した加々美氏の議論は日中両国間のナショナリズムをめぐる状況を理解する上で、示唆的であるといえよう。ただし、現在の日本社会におけるナショナリズムが「無根」「無思想」であるかどうかについては、なお検討の余地があろう。確かにインターネット等に見られるナショナリズムは情緒性、排他性の強いものであるが、他方で「等身大」世界を認識しながら真剣に日中関係の将来を懸念して発言している者も全くいないわけではないであろうし、どこまでが「無根」「無思想」といえるのかは疑問が残る。

ここまで3氏の報告の内容を振り返ってきたが、その中で中国における「伝統」と「近代」をどのようにとらえるか、「中国的近代」のあり方とはどのようなものかという点について、3氏の間で興味深い認識の相違が見られる。すなわち、茂木、江田両氏は「近代」を体現してきたヨーロッパに由来する諸価値について、中国がそれをどのように受け入れるのかという視点から議論を展開しているのに対し、加々美氏の場合は「ヨーロッパ近代」の前にアジアはなすすべなく「敗北」し、それを自覚した上で「等身大」世界から「抵抗」することの必要性を強調している。もちろん中国における「伝統」と「近代」についてはすぐに結論を出せるような問題ではないが、討論者はここで第3の可能性、すなわち溝口雄三のいう『異』ヨーロッパ的独自性¹⁾の視点の必要性を強調しておきたい¹⁾。つまり、「ヨーロッパ」か「非ヨーロッパ」ではなく、「異」ヨーロッパとして日本および中国はそれぞれの独自性を持つ前近代にもとづいて近代化を推進したという視点である。もちろんこれはヨーロッパの近代化と日本、中国の近代化が全く異なっており、比較の視座を持たないとするものではない。討論者はこれ以上の議論を展開することはできないが、中国の「伝統」と「近代」という視点からナショナリズムをどのようにとらえるかは今後も重要な論点となろう。

最後に、日中間における「反日」ナショナリズムと「反中」ナショナリズムの応酬という悪循環を断ち切るために、江田氏が「日中関係とナショナリズム—われわれはなぜこれほどまでに嫌われるのか」で「中国が批判する日本側の『歴史認識』批判を受けとめてから、われわれは初めて、中国の大国意識や肥大化するナショナリズムを批判する立場を獲得し、相互批判と相互理解の回路を開くことができるのではないのでしょうか²⁾」と述べていることに対して全面的に同意し、今回のシンポジウムを通して今後の討論者自身の研究を進める上で重要な示唆を受けたことに対して感謝したい。

(わたなべ なおと・近畿大学中央図書館)

¹⁾ 溝口雄三『方法としての中国』(1989年 東京大学出版会)第1章。

²⁾ <http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~shanghai/051117bbl.html>